特別寄稿

逃げない作家　瀬戸内寂聴さん

鎌田　慧

瀬戸内寂聴さんは、その一生を現実社会と真っ向から切り結んだ作家だった。

わたしは晩年のすこしの間、反原発運動などのなかで、集会を通じて面識を得ただけだった。それでも、運動にたいする真摯さが、よく行動にあらわれているのを感じていた。それが人柄と思想のあらわれだった。

「反権力の立場で私は作家として生き通してきた。そして五十一歳で出家して以来、自分の力の不甲斐なさを痛感し、書きつつ、祈りつづけている。

矛盾と不条理にみちたこの世だからこそ、無私の祈りが私たちを救ってくれるのだと信じている。」

九十一歳。２０１３年5月に上梓された『それでも人は生きていく』（皓星社）の前書きに書きつけられた言葉である。この本のサブタイトルは（冤罪・連合赤軍・オウム・反戦・反核）というもので、それぞれ、瀬戸内さんが関わったテーマであり、前書きの結語が「この本は私の心をこめた遺言である」というものだった。

サブタイトルは勿論、編集部がつけたものだが、これ以外にも「反権力」の重要な仕事が、明治末期、圧政の象徴としての「大逆事件」で処刑された管野須賀子を描いた『遠い声』であり、関東大震災の時に、陸軍憲兵隊に虐殺された大杉榮と伊藤野枝をテーマにした、『美は乱調にあり』と『諧調は偽りなり』である。このふたつの表題は大杉の言葉だが、五十一歳で出家して祈り続けた瀬戸内さんは、カオ

スの極限としての「乱調」のなかにこそ、「美」を感じて生きた一生だった。

わたしも冤罪の本を何冊か書き、大杉榮の伝記を書いた。そして明治政府の最大のでっちあげ事件だった大逆事件の被告、死刑判決を受けた坂本清馬についても書いた。坂本清馬は「冤罪」によって死刑判決を受けたものの、天皇の恩赦によって無期懲役に減刑された、12人のひとりだった。

その伝記を書いていたころ、東北地方を襲った大震災によって、福島第一原発の大事故が発生した。それで、瀬戸内さん、内橋克人さん、大江健三郎さん、落合恵子さん、坂本龍一さん、澤地久枝さん、辻井喬さん、鶴見俊輔さんとわたしを呼びかけ人にして、「さようなら原発」の市民運動をはじめた。

京都の仲間に円山公園での集会に呼ばれたとき、わたしは会場の控え室で瀬戸内さんに伺った。

「坂本清馬って、どんなひとだったですか」

坂本は１９７５年まで、生きていた。瀬戸内さんが高知県中村市（現四万十市）へ講演にいかれて、坂本さんにお会いされていたことは、地元の友人から聞いていた。

「清潔なひとだったですね」

瀬戸内さんは即答した。八十九歳、この記憶のよさに驚かされた。「清潔」の表現には綺麗好きというばかりか、雑念のないスッキリした人格が表現されている。この集会での瀬戸内さんの姿を、わたしは瀬戸内さんの前出『それでも人は生きていく』の解説で書き、最近だした『忘れえぬ言葉』（岩波書店）にも書きとめた。それまで知らなかった、宗教者としての瀬戸内さんの姿が印象的だったからだ。

ご講演が終ったあと、会場の「釜ヶ崎共闘」の赤い幟の下から、老労働者がよろめくような足取りであらわれた。右手を挙げて「質問があります」。生真面目な表情だった。

「先生、輪廻とはなんでしょうか」。法衣姿の瀬戸内さんは舞台の端まで歩をすすめ、舞台の下から救いをもとめるように見上げる作業衣姿の男を見つめた。瀬戸内さんは来世について語った。その視線が相交わる空間は一幅の宗教画のように美しかった。

原発事故の翌年の２０１２年7月、東京・代々木公園でひらかれた「さようなら原発」の集会は、17万人の大集会になった。瀬戸内さんは秘書の方にクルマ椅子をおしてもらっての参加だった。

「わたしは満九十歳になりました。わたしより歳上の方はいないと思います。『冥土の土産』に、皆さんがたくさん集まった姿をみたかったのです」といって、満場を笑わせた。ユーモアが身体からにじみでていた。

東京都知事選では「脱原発」を掲げた細川護熙候補を推して、東京で二度ほど街頭演説にたった。わたしも同伴していた。経産省前テントでの反原発一日ハンストにも、わざわざ上京されて、澤地久枝さんやわたしと一緒に座り込んだ。

このような行動は、まだ若い瀬戸内晴美の時代から積極的に参加されていた。66年暮れに、「徳島ラジオ商殺し」で被告にされていた冨士茂子さんと会って以来、21年間も支援運動をつづけられた。それもあって、「死刑廃止」を主張、大逆事件で処刑された管野須賀子、関東大震災で虐殺された伊藤野枝と大杉榮の伝記、大正の大逆事件と言われた、金子文子と朴烈の投獄事件を『余白の春』に書かれた。

そればかりか、連合赤軍事件の永田洋子被告など、女性の政治犯への同情が深かった。

「私が永田さんたちと交流したのは、根柢にあの事件は自分でもやったかもしれないという思いがあったからです」と言い切っている。1986年1月。永田洋子の公判で、瀬戸内さんは、政治犯に関わった意識についてこう述べた。「熱意に負けたのではありません。やはりそういう自分の逃げる姿勢というものは許せないんではないかと思ったからです」（「公判証言」）

瀬戸内さんがまだ「晴美」のペンネームだった頃に、わたしは一度お会いしている。江戸川橋（文京区）のすぐそばにあったマンションに住まわれていた、67年7月ごろ。上梓されたばかりの『死せる湖』を頂いた。「管野須賀子」を書きたい、と仰有ったのだが、わたしはまだ二〇代で、アナキズムについて無知だった。

政治参加（アンガージュマン）。良心的な作家の必然的な行動だが、大江健三郎さんとともに、反原発運動への瀬戸内さんの参加は、若い人たちに大きな勇気をあたえている。若者へのメーッセージ。

「若いということは何か、というと恋と革命です。どうか若い人は頑張って行動して革命を起こしてください。日本は革命を起こさなければならない状態にあります。」（「被災地の若者の姿に日本の未来を見直しました」『それでも人は生きていく』所収）

大飯原発再稼働に抗議して経済産業省前のハンストに加わる。
前列左から３番目が筆者 鎌田慧さん、寂聴、澤地久枝さん
2012 年 5 月 2 日（もうすぐ 90 歳）
撮影　斉藤ユーリ